

桜庭奈央（さくらばなお）、二十五歳。

……私は、見てしまった。

休日、買い物物の帰り道に。今日はデートに行けないからと断られたはずの彼氏が、スレンダーで細身の女の人と手を繋いで歩いている姿を。

目の前が、真っ白になった。足がすくんで、思わずその場に立ち尽くしてしまふ。

確かに、最近はお世辞にも上手くいっているとは言えない関係だった。

一人で過ごす時間が増えて、彼からの素っ気ないメッセージを何度も読み返しては、スマホの画面を見つめてため息をつくこともしばしばだった。付き合いたての頃は頻繁だったデートもしなくなつた。エッチだつて、愛撫もそこそこにすぐ挿入されるようなあまり愛を感じられないものだったし。

（だからって……浮気？ 最低じゃん……）

そういえば最近、彼から、もつと痩せたなら？ とかそんなことばかり言われていた。それはその、今にもぼきつと折れそうな枝みたいに細い浮気相手と比べていたわけか。

私は彼に見つからないようにそつと踵を返し、雑踏の中に紛れ込んだ。

買い物の袋がさつきよりもずしりと重くなつたように感じる。涙が溢れそうになつて俯きながら歩く。

ぼやけた視界の中、ふと目の前に大きな影が立ちはだかった。

顔をあげると——鍛え上げられた逞しい体つきの男性が、私の目の前に立っていた。

『TAKAMINE GYM』とロゴの書かれた黒いポロシャツ。その生地越しでも、がっしりとした胸板と肩のラインが浮き上がっている。袖口から覗く

腕も太く筋肉質で、その圧倒的な存在感に、私は思わず息を呑んだ。

（……すごい、ムキムキだ）

「新しくできたジムのご案内です。よろしければ——」

少し低めの落ち着いた声と一緒に、ティッシュの包みが目の前に差し出される。

大きな体つきに圧倒されながら彼の顔に目を向けると、意外なほど整った顔立ちで、思わず見惚れてしまった。

少し垂れ気味の優しい目元。温かみのある琥珀色の瞳。陽の光を透かして淡く輝く、くすんだ茶褐色の髪が目元に無造作にかかり、どこか色っぽい雰囲気を出している。

（……わ、すごい綺麗な顔。かつこいい……。ジムのトレーナーさんかな？）

そんなことを考えながら、ぼんやり彼を見上げていると、透き通った琥珀色

の瞳とぼつちり目が合ってしまった。

彼は一瞬驚いたように目を見開く。私の目が潤んでいるのが、見えてしまったのかもしれない。

彼はすぐに、ふわりと柔らかな笑みを浮かべた。

「……体動かすの、すぐくりフレッシュになりますよ」

大きな手で、まるで壊れ物でも触るかのように。彼はそつと私の手を取り、包み込むようにしてティッシュを握らせてくれた。

石鹸の清潔な香りに、ほのかに柑橘系の爽やかさが混じったような香りがする。

大きくて温かい熱が、私の手をすっぽりと包んで、それからすぐに離れていく。

（……優しい人だな）

すっかり参っていた心に、その優しさがじんわりと染み込んで、少しだけ心が軽くなった。

「……ありがとうございます」

小さく呟くと、彼は「いつでもお待ちしています」と言って、また次の通行人へと向かっていった。

その広い背中を見送りながら、私は思った。

（……このままじゃ、ダメだ）

その日の夜、私は彼に『別れよう』とメッセージを送った。すぐに『わかった』と返事が来て。

私の恋は、あっけなく終わりを迎えた。



それから一週間後、私は小さなジムでガムシヤラにランニングマシンを漕いでいた。

——そう、先日ティツシュをもらった、あそこのジムだ。

(よし！ 痩せてやる!!)

会員制で小規模のこのジム。昔は運動部だったけれど、社会人になってから運動はだいぶご無沙汰だった。家から近いし、小さいジムなら人目もあり気にせずに運動できるだろうということとでここに決めた。

(それに……。あの時ティツシュをくれた人の笑顔が、なんか忘れられないんだよね……)

元彼と別れた件については、三日間くらい引きずったけれど、もうくよくよと

悩むのはやめようと思った。別に元彼のためにダイエットを決意したわけじゃない。ただ、綺麗になって、早く新しい彼氏を見つけたかった。

元々太ってはいないと思うていたけれど、陸上部だった学生時代の名残で筋肉のついた身体の上に小さな贅肉が乗っていて、少しだらしない体つきになつていた、と改めて鏡を見て気づいたのだ。

（いい感じに汗かいてきた……！　走るのって気分転換になるし、案外気持ちいいかも！）

額に伝う汗を拭いながら、一心不乱に走り続ける。

そんな調子で走り続けていたら、ふと上から影が落ちてきて、横から話しかけられた。

「もつと腕を振って走るといいですよ」

どこかで聞いたことのある、落ち着いた低い声。

顔をあげた瞬間——思わず息を呑んだ。

白いタンクトップから覗く、鍛え上げられた腕と胸板。がっしりとした肩のライン。そして、少し垂れ気味の優しげな目元と、温かみのある琥珀色の瞳。

（……あの時の……！）

あの日、駅前でティッシュを配っていた人だ。間違いない。
驚いて、思わず足を止める。

「……ああ、すいません。ランニングの邪魔をしてしまつて。あんまり頑張っているようだったから、少しでもアドバイスしたくなっちゃつて」

「い、いえいえ……！」

思わず声の上擦つてしまう。会えるかも、と淡い期待はしていたけど、まさか本当に会えるとは思っていなかった。

「……あの、先日は声をかけてくださつてありがとうございます。ちよつと落

ち込んでたので、すごく嬉しかったです」

にこつと笑いかけると、彼はほんの一瞬だけ目を見開いて、それから嬉しそうに、どこか照れくさそうに笑顔を返してくれる。

「覚えてくれたんですか？　嬉しいな。僕はここのオーナーの、高峯泰雅（たかみねたいが）、と言います」

（……たかみね、たいがさん。オーナーさんだったんだ……）

気になっていた人の名前を、頭の中で大切に噛み締める。彼の名前というだけで、なんだか特別な響きに聞こえる。

「あの、私は……」

「桜庭さん、ですよ。入会書類を確認してる時に、お名前を拝見したもので」

そう言つて、頭をかいた時の腕の筋肉がぐつと盛り上がって、その動きがや

けに男性らしくて、なんだかドキドキしてしまう。

（元カレは細身だったからな……。筋肉ムキムキな人ってなんか新鮮……）

「……よかった。先週は元気なさそうでしたけど、……少しは元気になりましたか？」

背の高い高峯さんが、私の表情を確かめるように軽く腰を屈めた。視線が真っ直ぐにぶつかって、琥珀色の瞳が思ったよりも近い。

汗をかいいた顔を異性の、しかもこんなかつこいい人にじっと見つめられるなんて恥ずかしい。

「も、もうすっかり元気になりました！　もう元彼なんて忘れてやるぞーって感じで！」

「……元、彼？」

繰り返すように呟いた高峯さんの琥珀色の瞳が、一瞬だけ、ぎらりと何かを

宿したような気がした。

（……しまった、喋りすぎた）

けれどその光はすぐに消えて、高峯さんは慌てたように言葉を続けた。

「……い、いえ！ 詮索するつもりは全くなくて」

「いえいえ、私こそすみません」

慌てて手を振る。なんだか変な空気になつてしまった。

（……でも、ここまで言っちゃったし。なんだか、高峯さんには、話したくなっちゃうな）

その大きな存在に、安心するんだろうか。不思議と、この人の前では素直になれる。

「……高峯さんがティッシュをくれたとき、実は元彼の浮気を見た直後で。だから、すごく落ち込んでたんです」

「……そう、だつたんですか」

高峯さんの声が、低く沈む。

「でも……！ その日の夜にすぐ別れました。高峯さんに優しくしてもらつて、少し元気が出たから」

あくまでも軽い話を装って笑顔を作る。高峯さんはじつと私を見つめていた。

「どうして桜庭さんみたいな綺麗な人を、裏切れるんでしょうね」

真っ直ぐな眼差しに、心臓が跳ねる。

「あ、ありがとうございます……」

照れくさくて、思わず視線を逸らしてしまう。高峯さんは少しだけ間を置いてから、口を開いた。

「……あの、もしよければ、なんです。個室でトレーニング、してみません

か？ あの時、桜庭さんを元気づけられなかったのがずっと心残りで。今日こそは、しっかりサポートさせてください」

「え、でもそんな……っ、悪いですよ……」

高峯さんが半歩、こちらに身を乗り出す。その瞬間、彼の大きな体が視界を覆って、圧倒的な存在感に思わず息を呑む。逃げ場がない。

石鹼の清潔な香りに、ほのかに柑橘系の爽やかさが混じったような香りが鼻をくすぐる。

「……桜庭さんと、もつと話したい。二人きりで」

客としてではなく、一人の女として誘われているような気がした。高峯さんの優しい瞳の奥に、昏く熱を帯びた何かの気配を感じる。

その真剣な眼差しに、断ることなんて、できなかった。

「……お願いします」

そう言うとき、高峯さんはさっきの気配など最初からなかったかのように、ふわりと笑った。

（……高峯さんは優しいから。失恋した私に同情してくれているだけ。……何も起こるわけなんて、ない）

それ以上のことを想像するのは憚られて、私は慌ててその考えを頭から追いつ出した。

「それじゃあ、個室はこっちの奥の方なので」

歩き出した高峯さんの広い背中を、ほんの少し遅れて追いかけた。

個室のトレーニングルームは、思ったより広かった。マットが敷かれた床に、壁際にはダンベルやバランスボールが並んでいる。

「じゃあ、トレーニングの前に」

高峯さんが持っていた小さなバッグから、冷えたペットボトルを二本取り出した。

「さつき自販機で買ってきたんです。お水、飲みませんか？」

「ありがとうございます」

受け取ろうと手を伸ばすと、彼の大きな手が一瞬だけ私の手に触れた。

「……っ」

私が動揺したことに気づいているのかいないのか。高峯さんは柔らかに微笑んで、もう一本のペットボトルの蓋を開けた。

早まる鼓動を隠しながら、そつと上を見上げて高峯さんを盗み見る。

わずかに伏せられた長いまつげ。綺麗な顔立ちなのに、その下にある首は太くて遅しい。ゴクリ、ゴクリ、と水を飲むたびに、喉仏が大きく上下する。タンクトップから覗く、鎖骨のライン、その下の厚い胸板。ペとボトルを持つ腕は筋

張っていて、太い血管がくつきりと浮かんでいる。

（……かっこいい）

見とれていると、ふと目が合う。

「……見られると、少し恥ずかしいですね」

少しだけ笑みを深めて、そう言う。恥ずかしいと言いながら、その琥珀色の瞳はどこか楽しそうで。

「あ……。す、すみません……！」

慌てて視線を逸らすけれど、顔が熱い。見とれていたこと、バレてしまった。心臓がドクドクと早鐘を打つ。

「じゃあ、早速ですが始めましょうか」

高峯さんは少し笑って、マットの中央を指し示した。

「まずは基本のスクワットから始めましょうか。フォーム次第で効果が変わるので、しっかり見させてくださいね」

「……は、はい！ よろしくお願いします」

足を肩幅に開いて、ゆつくりと腰を落としていく。

「そうそう、いい感じですよ。ゆつくりお尻を引くようにして……はい、いいですよ」

言われた通りに腰を落として、また立ち上がる。

「もう一回。ゆつくり……、腰を落とすときは息を吐いて……そう、上手です」

何度か繰り返すと、今まで使っていなかった筋肉がプルプルと震える。

「じゃあ、次はフォームを確認しますね」

腰を落とし始めると、背後から大きな手が私の腰に添えられた。

「……、……っ！」

「腰の位置は……、そう、ここまで落として……」

落ちていた低い声が、後ろから私の耳元で甘く鼓膜を揺らす。

（こ、これは指導だから……！ 変なこと考えちゃダメなのに……！）

そう思えば思うほど、私の腰に添えられた手をさらに意識してしまう。

「……桜庭さん、内腿に意識を集中してください。膝が内側に入りやすいから、しつかり外に開いて」

「……！ ……ひうつ♡」

腰を支えている手とは反対側の手で、内腿をつつ……♡ となぞられて、思わず変な声が漏れ出る。背後から覆い被さる高峯さんの身体は、私の小さな身体をすっぽりと覆い隠してしまった。

トレーニングウェアの薄い布越しに、高峯さんの指先が、膝から内腿の付け

根までゆつくりとなぞりあげる。ぞわぞわ♡ と性感を湧き上がらせるようなその動きに、内腿がぴくぴくと震え、下腹部からじわ♡ と蜜が滲み出てくるのを感じる。

(……っ、これ、本当に指導なの……？♡ 変な気分になっちゃダメなの……、声、出ちゃう……っ♡)

「……ふふ、ほら、足閉じようとししないで。もつと外側に開いて……」

「……あっ♡ ふ、……んう……っ♡」

両方の手で内腿の付け根までゆつくりなぞられて、触られていないはずのお股が疼き出し、膣がきゅう♡ と締まる。

声を我慢しようと、唇をぎゅつと結ぶと、後ろから耳元を熱い吐息が掠める。

「息止めないで。……ほら、ゆつくり吐いて……」

「……あ、は、はい……！ ふう……、ん、あ、……あっ♡」

内腿をなぞっていた指先が、ついにこんもり♡ とした秘部の一番外の膨らみに触れる。明らかに性感を弄ぶような動きに、身体が期待するように熱い蜜がじゅわ♡ と溢れ出した。一番敏感なソコには触れないまま、くるくる♡ と周りをなぞられると、もどかしさに無意識のうちに腰を揺らしてしまう。

「……桜庭さん、どうしましたか……？」

「……あっ、……んう……っ♡ ……あ、……あっ♡」

焦らすように、最も敏感な場所は避けながら私の恥丘を撫でる動きに、次第に我慢が効かなくなってくる。

恥ずかしいのに、私の身体は快楽を求めて、高峯さんの指を追いかけるように腰をくねらせてしまう。下腹部からはもうとめどなく愛液が溢れてきて、ショーツをしとどに濡らしていく。

スクワットの疲れと切ない快楽によって膝の力が抜けて、ほとんど高峯さんの厚い胸板に身体を預ける形になってしまっている。薄いウェア越しに直接感じる高峯さんの心臓も、ドクドクと高鳴っているのを感じる。

（……足、もう力入んない……っ♡ 触ってほしくて、腰ゆれちゃってる……っ♡）

「た、高峯、さ……っ、あ、あの……、んう……っ♡ ……ん、ん……っ♡」

切なさで恥ずかしさで涙目になりながら、高峯さんの逞しい腕に縋る。少し腰を揺らすだけで、ぐちゃぐちゃになったショーツがにちゅり♡ と音を立てた。

「……ああ、もう可愛いな」

——カリッ♡

「……んあぁっ♡♡」

求めていた刺激に、脳天まで快楽が突き抜け、大きな声をあげてしまう。

「……直接触ったわけじゃないのに濡れすぎ……♡　こんなぴっちりとしたウェア着てるから、ぐしょぐしょに濡れたマン筋、浮き上がってますよ……」

「……あぁ♡　あ、あ、……はっ、あぁん♡」

「クリもどこにあるかはつきり見える……、こんな可愛い見た目して、案外クリ大きいのかな？　普段自分でいじってるんですか？」

カリッ♡　カリッ♡　くちゅ♡　くちゅ♡

「……あ♡　や、あぁ……っ、い、いわないで……え、……あ、ひぁ……っ♡」

短く整えられた爪で、カリッ♡　カリッ♡　とリズムカルに突起を弾かれる。その刺激に耐えかねて、熱い蜜がとめどなく溢れ出す。引っ掻かれるたびにくちゅくちゅ♡　と淫らな音が静かな部屋に響く。

「……恥ずかしい？　でもカリカリ♡　してるだけでどんどんえっちな汁が溢

れてきて……、僕の指にねっとり♡ 絡みついてきてる……♡ クリいじめられるの好きなんですネ、可愛い……」

「……あつ、あ♡ や、やだ……あつ、……んっ♡」

高峯さんの長い腕がお腹に回り、無意識に快感から逃れようとする腰をぐつと押さえつけた。

大きな身体に閉じ込められたまま、足をびくびく♡ と震わせて、快感を受け入れることしかできない。

カリカリッ♡ ぬちゅ♡ ぬちゅ♡

（カリカリきもちいい……っ♡ 恥ずかしいのに……っ、もつとしてほしいって言うみたいに腰うごいちやう……っ♡）

「……ひうつ♡ ……っ、あ、んうう……♡ ……あつ、……んあっ♡」

ウェア越しにクリトリスを爪で弾かれるたび、火照った身体はさらなる快感

を求めて、もつともつと腰を揺らす。けれど、限界を訴える太腿はガクガク
♡ と震え、もう立っていることすらやつとだった。

「……お、つと。……もう腰立たなくなっちゃった？ 本当に可愛すぎる……
♡」

高峯さんはその逞しい腕で私のお腹を抱えていた腕にぐつと力を込めると、
私の体を軽々と仰向けに回転させた。

「……え、ひゃ……っ♡」

不意に視界が回り、背中にひんやりとしたマットの滑らかな感触を感じる。

高峯さんは私を両腕で囲い込むように覆い被さり、その大きな影で私を飲み
込んだ。

快感で滲む視界の中、私を上から覗き込む高峯さんと目が合う。整った綺麗
な顔に、獣のような昏い興奮が滲んでいる。その熱を帯びた視線は、じっくり

と舐めるように私の痴態を捉えて離さない。

(……………！ 私いま、絶対はたしな顔してる……!!)

隠したくても、高峯さんに見つめられて、身体が甘く痺れて動かない。ねつとりとした視線に、身体のカカまで暴かれるようで、お腹の奥がきゅう♡と疼く。

「……………そんなに顔赤くして、お股とろとろ♡ にして……。ほら、見てください……。レギンス、桜庭さんのえっちな汁で色変わっちゃってますよ……。？ いやらしいおまんこだなあ……」

「……………あつ、……………や、……………あつ♡」

ろくに抵抗することも許されないうまま、大きな手がレギンスのウエスト部分にかかった。

有無を言わせない力で、私の腰をぐいと抱き上げると、レギンスとショーツを

まとめて引き下ろしていく。ぐちよぐちよ♡ に熟れきったおまんこがひんやりとした外気に触れ、切なげにひくり♡ と戦慄いた。

「……パンツ、にちゃあ♡ つてすごい糸引いてますよ……。あれだけでたくさん感じちゃって可愛いですね……。♡ あー……。むわあ♡ つて濃い雌の匂いする……。もつと直接嗅ぎたい♡」

（汗かいてるのに……。!! 汗かいたお股の匂い嗅いじゃ恥ずかしいのにい……。っ♡）

「……や、たかみねさ……。っ、あ……。っ♡ いま、あせかいてるから……。あっ♡ ……あ、やあ……。っ♡」

私の言葉なんて聞こえないみたいに、彼は私の足の間に割り込むようにして、ぐつと腰を落とした。

ほとんど顔を埋めるくらいの近さで、ぐちよぐちよ♡ に熟れてヒクついたお

まんこを正面から覗き込まれる。

「……………あ、やだ……………あっ♡」

すんっ♡ すんっ♡ と鼻を鳴らすように、むわり♡ と香る女の匂いを堪能される。彼の息がかかるたびに、早く触ってほしいというように、入り口がヒク♡ ヒク♡ と男を誘う。

「あ……………、これが桜庭さんの匂いなんですね……………♡ ぐっちゅぐちゅに熟れて……………濃くてたままない……………♡」

（あ……………♡ 高峯さんに見られちゃってる……………♡ えっちなトレーニングで発情してるの全部ばれちゃってる……………♡）

高峯さんは、両手の親指で、左右の柔らかな肉をゆつくりと割り開き、閉じたりする。その度に、ぬちゅ……………♡ ぬちゅ……………♡ とえっちな水音が響き、恥ずかしさと期待で私の奥がきゅん♡ と甘く震えた。

「あー……、おっきいクリ、可愛い……♡ 女の子のおちんちんが、期待するみたいにな、ツン♡ って勃起して、ひく♡ ひく♡ してる……。今ちゃんと可愛がつてあげますからね……。♡」

——カリッ♡

「……んあっ♡」

待ち望んでいた刺激に、身体がビクン♡ と大きく跳ねた。愛液でてらてらと光った秘豆を爪の先で引つ掻かれる。

カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡

「……あ、ああっ♡ それ、だめ……。えっ、……。あっ、あう……。っひ……。っ、ああ……。っ、んん……。っ♡」

さつきレギンス越しにされていたことと同じことをされているはずなのに、桁違いの快感が脳のでっぺんまでびりびり♡ と駆け抜けた。

(……これだめなやつ……っ♡ クリちゃん……っ♡ カリカリきもちよすぎ……っ♡ おなかあつくて……っ、きゆうきゆうする……っ♡)

「……ふふ、腰浮いちゃって可愛い……♡ このおっきい女の子ちんちは、カリカリとすりすり、どっちが好きかな……？」

——グリイツ♡

「……あ、あっ♡」

剥き出しの突起を大きな指の腹で、執拗に押しつぶされる。灼熱の塊を押し当てられているような鋭い快楽に、頭の芯が真っ白に焼き切れてしまいそう。

そのまま薄い皮をムキ♡ ムキ♡ するように、前後にぐり♡ ぐり♡ と蹂躪されて、蜜が止めどなく溢れて高峯さんの指を汚していく。

グリ♡ グリ♡ ぬちゅ♡ ぬちゅ♡

愛液でぬるぬると濡れた秘豆は、皮肉なほどよく滑って、高峯さんは淫らな

リズムを加速させていく。

「……あっ♡ しよれ……っ、すりすり……らないっ♡ ぐりぐり、つよすぎるから、だめ……、なの……っ♡ あ、……んあっ♡ や……っ、ひう……っ♡」

「……ダメじゃないでしょう？ こんなに気持ちよさそうなのに……♡ 自分から腰浮かせて、僕に勃起クリトリス押し付けてるの、気づいてます……？」

「……あっ♡ んあ……っ、ちが……っ、あ♡ そ、んなの……してな……っ、いい♡ あ、……やだ……あっ♡ んう……っ、ひ、……ああっ♡」

その言葉とは裏腹に、私はさらなる快楽を乞うように無意識に腰をくねらせた。

愛液でぐちゅぐちゅ♡ に濡れたクリトリスを、高峯さんの指へと自ら擦り付ける。もつと、もつと強く、たくさん押しつぶしてほしい――。

グリッ♡ グリッ♡ ぬちゅっ♡ ぬちゅっ♡

(……あつ、これだめなやつ……♡ あたまチカチカしてきた……っ♡

あー……っ、だめだめ、きちやう……っ♡♡)

頭の中で、火花が弾ける。太腿がガクガク♡ と震えて、絶頂に近いことを知らしめられる。

グリッ♡ グリッ♡ グリッ♡ ぬちゅぬちゅっ♡ ぬちゅぬちゅっ♡

「あ……っ♡ あくく……っ♡ も、らめ、……あ、……んあっ♡ イク、イ

ク……ッ♡ あ、……あつ、ああ……っ♡♡」

グリグリッ♡ グリグリッ♡ ぬちゅぬちゅぬちゅっ♡

「……かーわいい。あー……、きちやいますね、全身ビクビク♡ してイキたがつてる……♡ 女の子ちんちん、グリグリ♡ されてアクメして……♡」

グリイッ♡♡

「……あ、あ……っ、イク……っ♡♡♡ ……あ、あああっ♡♡♡」

——ビクビクビクッ♡♡

「あゝゝ……っ♡♡ んうっ、あ、ひぐ……っ♡ ……あ、は……あっ、……ふっ♡」

電撃のような快楽が全身を駆け巡り、目の前で閃光が弾けた。背中が弓なりにしなり、ビクン♡ ビクン♡ と痙攣した後、身体がゆっくりと弛緩する。

「……はっ、あ、……ふっ♡ ……は、あっ♡ ……ん、……あ、ふ……っ♡」

（あー……、イっちゃった……♡ 高峯さんの指で……♡）

目を閉じて、絶頂の余韻にふるる、と身を震わせる。一つ息をついて、涙の滲んだ目で高峯さんの方をちらりと見やる。

琥珀色の瞳が、あられもない私の姿をじいつと映していた。蕩けるような、熱を孕んだ目で。慈しむような愛しさと、獲物を追い詰める捕食者のような嗜

虐心。そのどちらとも取れるような、深く、熱い眼差しに、絶頂を迎えたばかりの下腹部が、きゅう♡ と疼く。

高峯さんの指先がそつと私の頬に触れ、目尻からこぼれ落ちた涙を優しく掬い上げる。

「桜庭さんはそんなに可愛い声でアクメしちゃうんですね……♡ クリだけでこんな激しくイけるのに……。ナカまで可愛がったらどうなっちゃいますかね……。？」

私の涙を掬った指は、そのまま下腹部をするり♡ となぞり、ぐちゃぐちゃ♡ に熱く熟れた私の割れ目に当てがわれる。

「……ひう、……あつ♡」

「もうここ、すごいことになってますけど。えっちな穴が、ヒク♡ ヒク♡ つて欲しがるみたいにくばくば♡ してる……♡」

ゆっくりと、人差し指が膣の入り口をくるくる♡となぞる。わざと音を響かせるみたいにトン♡ トン♡ とタップすると、くちゅ♡ くちゅ♡ といやらしい水音が響く。

「……あ、……んうつ♡ お、おと……、や、あ……っ♡」

期待にひくつく膣が、止めどなく蜜を溢れさせる。もうお腹の奥はきゅん♡ きゅん♡ と疼いて、早く挿れてとばかりに、真つ赤に熟れた秘裂がくば♡ くば♡ と口を開けている。

「早く指を挿れてほしい……？ 健気で可愛いおまんこ……♡ ……ふふ、僕の指太いから、少しずつ慣らしていきましようか♡」

つぶ……っ♡

(……あ♡ 挿入ってきたあ……♡)

膣襞を一つ一つ確かめるように、ゆっくりと高峯さんの中指が私の蜜壺を犯

す。

「……あ、……ふっ、うあ……っ♡」

（高峯さん、指、太い……っ♡ 一本で私のナカ、いっぱいになっちゃ
う……っ♡）

「クリはこんなに大きいのに、ナカは狭いんですね……♡ 僕の指、きゅう
きゅう♡ に締め付けて、ビクビクしてる……。このまま進めますね……」

ぬぷ♡ ぬぷ♡ と第二関節まで沈み込んだところで、彼は指を止めた。彼
の太く長い指は、いとも容易くざらざらとした私の弱い場所を探り当てる。

——コリッ♡

「……ひっ、……あ♡♡」

「あー……、見つけちゃいました、ココ……♡ 桜庭さんの弱いところですよ
ね……♡」

そのまま関節を曲げて指の腹で、Gスポットをくいつ♡くいつ♡と優しく押し上げるように刺激される。クリトリスの鋭い刺激とはまた違った、ずん♡と重い快楽が全身を駆け巡る。

くいつ♡くいつ♡ぐちよっ♡ぐちよっ♡

「あゝ……っ♡♡や、あ……っ、しょこばっ……か、……ひうつ♡……あ、は……あっ♡♡」

「あー……♡♡ここいじめると、きゅう♡きゅう♡ってナカ締まってくる♡奥からとぷ♡とぷ♡って蜜もたっぷり出てきてますよ。音すごいのかかりますよね……？」

わぎと音を聞かせるようにぐちやつ♡ぐちやつ♡と掻き回される。羞恥と快楽でまた膣が締まって、さらに彼の指を締め付ける。

「あ、あ……っ、ひう……っ♡♡や、やら……っ、あ、あ♡なんか……あっ、

あ……っ♡　なんか……っ、でちゃう……っ♡　でちゃうからあ……っ♡
や……あ、だめ……っ♡」

漏らしてしまいそうな本能的な羞恥に、縋るように両手で高峯さんの逞しい手首を掴んだ。けれど、私のそんな必死な抵抗は、鍛え上げられた高峯さんの肉体の前では無意味だった。

それどころか、必死に縋り付く私の様子を見て、さらに興奮を煽られたのか、高峯さんの瞳が熱く、昏く濁っていく。

「……そんなとろけた顔で言われたってやめられませんよ……♡　その顔見るともつとぐちゃぐちゃにイかせたくてたまらなくなる……♡　いっぱいえっちなお潮吹いてイっちゃってください……♡」

熱を孕んだ低い声が降ってきたかと思うと、掴んでいたはずの手首が、いとも容易く振り切られた。そのまま、膣内を抉る指の速度が一段と激しさを増し

ていく。

（もうむりなのに全然やめてくれない……♡ ナカ、ぐちやぐちやに掻き回されてる……♡ お腹の奥あつつい……♡ ほんとにでちゃう……♡ ぜんぶでちゃうう……♡♡）

こりこりこり♡ こりこりこり♡ こりこり♡

ぐちゅぐちゅ♡ ぐちゅぐちゅ♡

「……あ、だめだめ……え♡ んあ……♡、は、あ……♡、イク……！♡
 イっちゃうから……♡ あ♡ てるてる……♡ でちゃうう……♡♡」

——ビクビクビク♡♡

ぷしやあああああ♡♡ ぴゅ……♡♡ ぴゅ♡♡

身体が弓なりにになり、大きく痙攣する。指でほじられて赤く膨れあがったソコから溢れ出した潮が、高峯さんの腕やウェアを汚した。

「……ああつ、は、……うう……♡ ……ふ、……んあ……♡ は……っ♡」

（うう……、またイカされちゃった……♡ イきすぎておかしくなる……っ

♡ 高峯さんにぐちゃぐちゃに壊されちゃうよお……っ♡）

こんなに激しく果てたのに、高峯さんの指はまだ私のナカに沈んだままだった。それどころか、充血してぐちゅぐちゅに腫れたGスポットをよしよし♡するみたいに、緩く指の腹で擦られる。

「……ひう……っ♡ は、あ……っ♡ たかみねさ……、……ふっ、……あ♡わ、わたし……っ、もう……っ♡」

涙目で彼を見上げ、限界を訴えて必死で首を横に振る。けれど、高峯さんは愛おしげに私の頬を撫でるだけで、無慈悲にも指をさらに奥へと侵入させた。

「……もつと奥がいいんですね♡ 桜庭さんはえっちで可愛いなあ……。僕のが入るように、ちゃんと奥までほぐしておきましょうね……。♡」

——こりゅっ♡

「……おっ♡♡♡」

高峯さんの太い指が、さらに奥の、ぷっくり♡と膨らんだ子宮の入り口を擦り上げる。

強烈な刺激に、脳裏がチカチカつと点滅する。

「……桜庭さん小さいから、僕の指だと奥まで届いちゃいますね……。いや、僕が大きいのかな、まあいいや。じゃあ、この一番奥で本気アクメキメちゃいましようね……♡」

こりゅっ♡　こりゅっ♡　こりゅっ♡

ぐちゃっ♡　ぐちよっ♡　ぐちよっ♡

「……ひ、あぐ……っ♡　しよれ……っ、あぁっ♡　ほ、ほんと、だめ……っ、

あ、……おっ♡♡」

（おまんこのいちばん、おく……っ♡ ほじられてる……っ♡ 長い指でぐちゃぐちゃに掻き回されて……っ♡♡ 本気アクメさせられる……っ♡♡」

「おっ♡ って下品声出てますよ……♡ もう身体のビクビク止まりませんね……♡ あー……、かわいい、ほんとにかわいい……♡」

綺麗な琥珀色の瞳が、獣のような昏い興奮を宿している。大きな影が上から覆い被さってきて、私の唇を塞ぐ。戸惑う間もなく、熱くてぶ厚い舌が口内を蹂躪する。

「……ん……っ♡♡ ……んっ、ふ……っ、んぐ……っ♡♡ ふ……っ、んう……っ♡♡」

酸素を求めるようにさらに大きく口を開こうとすると、そのまま舌を捉えられ、じゅぷっ♡ じゅぷっ♡ と吸われた。

（んむう……っ♡ くるし……っ♡ もうなにもかんがえられない……っ

♡♡

上も下も塞がれて、逃げ場のない快楽がお腹の奥底に溜まっていく。脳裏ではバチン♡ バチン♡ と火花が弾け、全身の肌が栗立ち、脳の芯までドロドロに溶かされていく。

「……んう……♡♡ あ、……ふ、あ……っ、ぐ……っ♡♡」

膣壁が激しくうねり、高峯さんの指をぎゅうぎゅう♡ に搾り取ろうと締め付ける。

けれど、彼はその圧を跳ね返すほどの力強さで、子宮口をとちゅっ♡ とちゅっ♡ と執拗に突き上げ続ける。

こりゅこりゅ♡ こりゅこりゅっ♡ ぐちゅぐちゅっ♡ ぐちゅぐちゅっ♡
じゅるり♡ ちゅぱあっ♡ ぐちゅ……っ♡ じゅるう……♡♡

（あ、これだめなやつ……っ♡ さつきイッたばっかりなのに、またイカされ

ちやう……っ♡♡ 濃厚ディープキスしながら、ぶっとい指でポルチオとちゅとちゅ♡ されてイっっちゃう……♡ いちばん深いアクメきちやう……っ♡♡)

高峯さんは一度唇を離すと、そのまま耳元で熱い吐息とともに囁いた。甘ったるくて低い声が直接鼓膜を震わせて、ぞくぞく♡ と全身の肌が粟立つ。

「あー……、可愛い。子宮降りてきたのわかります？♡ 僕の指でイカされたいつて言うみたいにぎゅうぎゅう搾り取ろうとしてくる♡ 奥の一番深いところでアクメキメちやいましょうね……♡」

ぐりゅっ♡ ぐりゅっ♡ ぐちゅんっ♡ ぐちゅんっ♡

「……あつ、んう……っ、おっ!? あ、ぐ……っ♡ ひあ……っ、んぐ……っ

♡♡」

太い指でポルチオを執拗に突かれ続けて、身体はいよいよ快楽の限界を迎える。お腹の奥がふわふわ♡ と甘く緩み、引き攣るような痙攣が全身を支配し

ていく。

「…………あ、ああ…………っ♡ た、かみねさ…………、あっ♡ ……んっ、あっ、ア♡♡ またイク…………っ、また…………っ、イクイク…………っ♡♡ ひうっ♡♡ あゝ…………っ♡♡」

男の太い指で、おまんこを好きなように蹂躪されている。自分では決して届かない、身体の奥深くの急所まで完全に支配されて。自分で自分を慰めるのは比べものにならないほどの暴力的な快楽に、脳の芯までドロドロに溶かされる。

ぐりゅぐりゅっ♡　ぐりゅぐりゅっ♡　ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡

「あ…………、名前呼ばれるのいいですね…………♡　僕の名前呼んでイって♡…………奈央さん♡」

愛しげに名前を呼ばれた瞬間、理性を繋ぎ止めていた最後の糸が、ぷつりと

音を立てて切れた。

「……ア、ああ……っ♡ んぁ……っ、イク、イク……うっ♡♡ たかみ、ね
さ……っ、あ……っ♡ んう……っ、あ、ああっ、あ……っ♡♡ イクイ
ク……っ♡♡ たかみねさん……っ♡♡」

——ビクンッ♡♡ ビクンッ♡♡♡♡ ビクンッ♡♡♡♡

ぶしやあああああああ♡♡♡♡♡

あまりにも大きな絶頂が私の全身を貫き、身体が大きく跳ねた。すでに空っぽだと思っていた身体の奥から、追い討ちのような熱い飛沫が再び噴き出し、高峯さんの全身をさらにぐちゃぐちゃに汚していく。

「……ふ、……あ♡ はー……っ、は……あ♡ ……ん、……ふ、う♡」

(……アクメ、ふかい……♡ あたまぼーっとする……♡)

「……ふふ、奈央さんの体液で僕の身体、びちゃびちゃになっちゃいました

ね……♡ 本気イキする姿、可愛かったですよ♡」

高峯さんは優しく、私の唇に触れるだけのキスを落とした。先ほどの暴力的な快楽が嘘だったかのような甘い戯れに、乱れた呼吸のまま、胸の奥が熱くときめく。

（……ああ、もう目開けてられない……。寝ちやいそう……）

視界の端から輪郭がぼやけ始め、彼の囁きが少しずつ遠く、心地よく反響する。抗いようのない甘い微睡みに包まれ、私の意識は、深く、深くゆつくりと沈んでいった。

【回想…高峯】

開業準備で忙しくしていた頃、僕の食事はもっぱらコンビニだった。

ある日、いつものコンビニに行くと、向かいのカフェの窓際の席にいる女性が目についた。

ピンと背筋の伸びた姿勢、さらりと顔にかかった髪を耳にかけの姿が、なんだか美しく、目が離せなかった。

それから僕はコンビニに行くたびに、向かいのカフェをちらりと見るようになった。

彼女は、一人で本を読んだり、コーヒーをゆつくりと味わいながらぼんやりと外を眺めていたり。ある日、細っこい体の男と親密そうに並んで座ってるのを見て、心底がっかりしたのを覚えている。

だけど、次第に彼女はスマホを眺めながら、物憂げな表情をすることが多くなった。あの男が隣に来ることも、もうなかった。

元氣な姿に戻ってほしいと願っても、窓越しに彼女を盗み見るだけの僕に、

できることは何もない。

だから、彼女が潤んだ瞳でティッシュを配る僕の前に現れた時、どうにか励ましたくて、思わず声をかけてしまった。

ありがとうございます、と小さく返してくれた彼女の声は、悲しみに震えてはいたけれど、想像していた通り——いや、それ以上に可憐で。

不謹慎だとはわかりつつも、彼女と言葉を交わせたことに、鼓動が高まるのを感じた。

それから三日後、入会書類を確認していると、僕が惹きつけられてやまない、あの女性の顔写真があった。

（あのカフェの女性だ……！ 桜庭奈央さん、か……）

美しい彼女によく似合う、素敵な名前だと思った。

「奈央さん……、奈央さん……」

言葉の響きを確かめるみたいに、ほんの小さな声で、愛しい彼女の名前を口に出してみる。

書類には、入会希望日が四日後だと記されていた。

それから当日までの四日間、僕はカレンダーを見つめては、彼女になんて声をかけようかと、まるで初恋をする少年のように胸を躍らせていた。

当日、目の前に現れた彼女は、私服のときとは違うぴっちりとしたグレーのウェアに包まれていた。思ったよりもずっとむっちりとした肉感の太ももや、着痩せするタイプだったんだなと思わせる、しなやかで豊かな胸の曲線。彼女が動いたびにウェアに浮き出る柔らかなラインに、僕の視線はどうしても釘付けになつてしまった。

煩惱を振り払い、オーナーとして、努めて気さくに話しかける。

ランニングマシンを漕ぐ彼女からは、柔軟剤の花のような匂いと、それに混じって、体温を孕んだ甘い汗の香りがした。

あの男とは別れた――。彼女の口からそれを聞いた瞬間、僕の心は卑しくも歡喜に震えた。

個別指導を提案したのは、彼女を元気づけたい思いもあったが、半分は二人きりになりたいという僕の下心だった。

だが、誤算があった。汗をかいて、頬を赤く染めた彼女がこれほど欲情を煽るものだとは思ひもしなかったし、何より、あの男と別れたという事実が僕の理性を狂わせた。

ほんの少し触れるだけのつもりだった指先が、気づけば自分でも制御できないほど深く、彼女を求めていた。

(……ああ、この女性がどうやって啼くのか、もつと知りたい)

そんな黒い欲望が顔を出して、彼女の性感を引き出そうと躍起になる。

グレーのレギンスのクロッチに、じんわりと広がる甘い蜜に、最後の理性がぶっつん、と弾けた。

好きな女性を自分の指一本で無様に蕩けさせ、絶頂へと突き落とす。

この蕩けきった顔を、あの細い男も見たのだろうか。そう思うだけで、気が狂いそうなほどの嫉妬に焼かれそうになる。けれどそれは同時に、僕の手で彼女の全てを上書きして塗りつぶしてしまいたいという強烈な支配欲に火をつけた。

あの男のことなんて一ミリも考えないでほしい。彼女の頭の中を僕だけで埋め尽くしたい――。

そんな昏い衝動に突き動かされるまま、意識を手放すまで何度も絶頂を強い

てしまったのは流石にやりすぎだっただろうか。

けれど、僕の腕の中で力なく、子猫のようにビクビクと身体を震わせる姿は、どうしようもなく僕の庇護欲と征服欲を煽り、たまらなく愛おしかった。

僕の隣ですうすうと眠る彼女の長い髪をそつと梳きながら、そんなことを考えていた。

意識を手放した彼女の身体を優しく拭い、予備のウェアを着せてから、使っていない休憩室のベンチへと運んだ。

毛布を掛け直し、しばらくその寝顔を見つめていたけれど、この後にどうしても外せない仕事を入れてしまった自分を、これほど恨んだことはない。

（そんなに無防備な顔をして……。寝てる姿も可愛い……）

寝顔を見つめていると、彼女の瞼がぴくりと震えた。きつと、もうすぐ目覚

めるだろう。そのときそばにいられないのが心苦しい。

「……奈央さん、また会えるの楽しみにしていますね」

そつと彼女の柔らかな頬にキスを落とす、僕は部屋を後にした。